

国際文化フォーラム通信

no. 100

歴代事務局長
インタビュー

特集

公益財団法人
国際文化フォーラム
THE JAPAN FORUM
日本国際文化交流財団
일본국제문화교류재단

歴代事務局長インタビュー

私の決断

★撮影：大木 茂

1987年6月22日に出帆して26年、国際文化フォーラムはどんな羅針盤のもと進んできたのか。さまざまな状況とどう向き合ってきたのか。歴代事務局長に、その航路を振り返りながら、下してきた決断を語っていただきました。



市原徳郎

Ichihara Tokuro

1987.6-1990.12

無から有をつくる

在任中のおもな事業：財団設立の準備から発足までの諸活動。北京市青少年日本語コンテストなど中国関連事業、ユーロバリア89ジャパン〔ベルギー〕参加、国際文化交流情報誌『ワールドプラザ』創刊、機関誌『国際文化フォーラム』発行など

★

私が新しい財団の設立プロジェクトチームに加わったのは1987年2月のことです。もともとこのプロジェクトは外務省の提案で始まりました。ジャパンバッシングが激化する一方、海外の日本語学習者が増えていました。これに対応するために、国は国際文化交流を推進する民間財団が必要となっていたんでしょう。提案というよりもかなり強い要請でしたね。それから、受け手の野間惟道講談社社長（第5代）も、第4代の省一社長とは違う

国際文化交流をやりたいという気持ちがあったのでしよう。省一社長は出版文化の国際交流やアジア・ユネスコ文化センターの設立に尽力しましたから。1986年7月の役員会で、惟道社長が日本語と日本文化を軸にした国際文化交流の財団をつくりたいと提案し承認されたんです。

外務省からは年度内につくってほしいと、催促の電話が矢のようにかかってくるわけですよ。それなのに、なかなか進まない。それで、とうとう1月に広

告局長だった私は社長に呼ばれて、財団設立準備のチーフとなってほしいと言われました。50歳過ぎてから英語をやるのは勘弁してくださいって、すぐさま断りました。だけど、仕事をする相手はみんな日本語ができるし、世界に日本のことを知ってもらう仕事だって言われて、もう断る理由がなくなっちゃった。外務省に私の経歴を出して、私が財団準備室のチーフになることので承を得ました。

それにしてもです。5月までにはつくってほしいというんですね。メンバーは5人ぐらいいましたけどね、みんな財団に関わったことなんてないし、専任でやっていたのは3人ですよ。私は以前、アジア・ユネスコ文化センターの規模を大きくするときにお手伝いをしたことがあり、少しは事情がわかっていました。それでも大変ですよ。私が前職の引き継ぎをして実際に設立準備にとりかかれるようになったのは3月。いくらなんでも5月は無理だと説得して、6月に照準を合わせました。講社社1社ではなくほかの企業もいっしょに、ということで、まずは出捐企業を決めて、3億円の基本財産の割り振りをして、設立趣意書、寄附行為をつくり、事業計画と予算案を決め、役員を委嘱し、賛助会員を募り、財団の名前を決め……。実は、名称は「国際文化協力財団」となる予定でした。これで名刺やハン

コまで作りましたよ。でも、ありきたりすぎるんじゃないかって声が上がって、発足直前に「国際文化フォーラム」になったんです。

それでようやく設立の仮申請が許可されたその日に、惟道社長が亡くなりました。茫然自失とはこのことです。しかし、1週間後には設立パーティが予定されていて、400人に招待状も送付して出欠までとっていた。やるしかない。すぐに、代表変更の書類を出しました。そして財団設立の認可が下りたのが、パーティの前日、6月22日です。スタッフ全員が必死でした。

大海への船出

財団ができて、さて肝心の事業です。何をするのか、大きな方向性は決まっていたものの、具体的なことを立案していかなきゃいけない状況でした。ネタさがしのために、ほかの財団が何をしているのか、ずいぶんリサーチもしましたね。

外務省から提案があって、旗揚げ公演として日本研究国際シンポジウム「ジャパンプロブレムは存在するか」と日本語国際シンポジウム「諸外国での日本語教育の現状と問題点」をやりました。日本語国際シンポジウムは国際交流基金と共催しまし



日中共同で作成した日本語実力試験問題10年分をまとめた冊子。

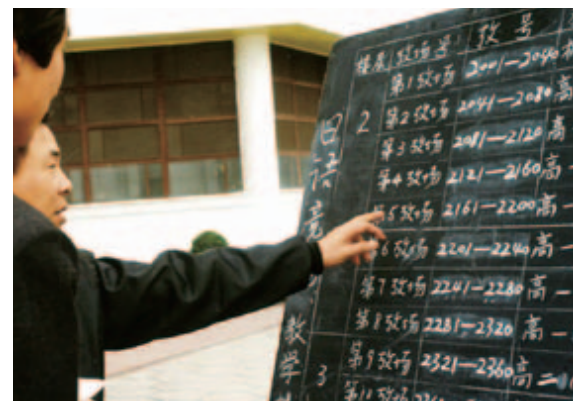
た。日本研究のほうは特に外務省がやりたかったんです。ジャパンバッシングに対抗するために、日本の有識者と海外の日本研究者をパネリストにして、日本理解の一助にしようと思っていたんですね。

その後、中国、韓国、タイ、アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパ各地で、日本文化紹介の展覧会や講演会をやりました。特に思い出深いのは、1991年にロンドンで開かれたジャパン・フェスティバル「Visions of Japan 展」の企画に協力した時のことです。会場にいらした皇太子にフォーラムの平常の活動とこの企画への取り組みを説明すると、「ご苦労様です。これからもよろしくお願いします」と声をかけられ、大変光栄に思い、恐縮しました。

また、国内の国際化も当時の大きな課題でした。地域での国際交流を促進し、その担い手を育てるために外務省で国際文化交流情報センターをつくるから、機関誌をつくってほしいという話ができました。これこそフォーラムに期待されていたことです。こちら、何か柱となる出版物を出したいと思って



1993年、常務理事として市原氏が行ったヨーロッパ翻訳者会館(ドイツ・シュテレン市)への図書寄贈贈呈式。左はレジナー・ピータース同会館図書部長(当時)。



北京市青少年日本語コンテストでは日本語実力試験も行われた。写真は、会場を確認する参加者。

いたので、これはいいじゃないかということになりました。それが、『ワールドプラザ』の創刊です。内容は、おもに国内で行われる国際交流イベントのお知らせや世界各地の大使館から収集した情報です。機関誌というものの、外務省の買い上げは950部だけで、あとはこちらの負担でしたから、財政的に非常に苦しかった。結局、8年後に休刊が決まりましたが、そのときも、その後も外務省関係者からは何とか続けてくれないかと強く言われました。できるなら、続けたかったですよ。でも、資金には限りがありますからね。

フォーラムの独立へ

五里霧中のような状態で始めた事業は、ほとんどが外務省と相談しながら二人三脚のようにやったのですが、中国での日本語関連の事業はフォーラムが独自でやったものです。中国に詳しいスタッフがいたんです。放送大学のカリキュラムや教科書をつくったりしました。いちばん心に残っているのは北京市青年連合会といっしょに実施した「北京市青少年日本語コンテスト」です。毎年、2,000人を前にあいさつしましたよ。北京大学の優秀な学生が通訳してくれてね。いつものように「ニーハオ」ってあいさつしたら、ある人が幕間に「市原さん、

ちがいます」と言うんですよ。「大勢を前に言うときは、ニーメンハオです」って。ええっ、もう3年もやっちゃったよって。そんなこともありました。

ほかの事業は単発が多かったのですが、このコンテストは10回続きました。中国の関係者と仲良くなって、横のつながりで人脈も広がりました。フォーラムの名前を知ってもらうために、一発豪華主義も意味があったと思いますが、国際交流は継続しなくちゃいけないと、この事業で実感しました。中国とやったことも良かったと思います。

1991年、ちょうどバブルがはじけたころです。講談社で、増えてきた国際関係事業を見直すことになりました。フォーラムは独立した財団法人ではありませんが、講談社の国際交流推進室から出向したスタッフが事業を行っていたんです。財団活動をさらに進めるために独立させるべきだとの声もあったので、フォーラムを実質的に独立させることになりました。独立するにあたって、基本財産はいくら必要かと当時の野間佐和子社長に聞かれて、私は20億円と答えました。日航財団が20億、東芝国際交流財団が30億円の基本財産でしたから、妥当だと思いましたし、実際、そのころの金利は5%以上ありましたから、20億円あれば運用益で事業は回っていくと考えたんですね。

国際交流は
継続しなくちゃいけないと
この事業で実感しました

このような状況下で事務局長のバトンを牛島さんに渡すことになりました。設立準備から数えると5年。何もなかったところから財団をつくり、総花的ではありますが、ある程度の軌道はできたわけですから、後は方針に沿って事業を足したり引いたりしていけばいいだろうと思っていました。次の人たちの時代です。 **FT**



1989年にベルギーで開かれた「ユーロパリア89ジャパン」に出展。蔵書票（所蔵者を示すために書物の裏表紙などに貼る小紙片）に見入る来場者。
上はTJFがつくった蔵書票。参加者に配った。



牛島通彦

Ushijima Michihiko

1991.1-1998.3

民間の高校生大使 を育てたい

在任中のおもな事業：全中国外国語学校中学生日本語弁論大会、中国中学校日本語教師研修会、アメリカ・ウィスコンシン州日本語教育支援事業、図書寄贈、国内の高校の中国語・韓国朝鮮語教育の現状調査など



1994年に中国南京で開かれた外国語学校中学生日本語弁論大会。

★
事務局長になってそれまで温めていたことをどんどん実行していった。大きなこととしては三つ。

まず、国際文化交流に熱い思いをもつプロパーの採用。新聞広告で募集したら優秀な経験者の応募もあったけれど、あえて未経験者を4人採用した。財団ができて4年が経ち、講談社から独立することが決まったところで、フォーラムにとっては新たな門出なわけ。同じ志をもった若い人たちといっしょに学びながら、国際文化交流に全力を注ぎたいと強く思ったんだよね。

二つ目はそれまでの事業の見直し。それまでのように総花的にやったのでは、小さな財団では限界があるようになるようになっていたから、事業を絞ろうと思った。海外での日本語教育といったときの地域は、地政学的にいった東アジアと環太平洋が大事。具体的にはおもに中国と韓国とアメリカ、オーストラリアだよね。

年齢層も絞ることにした。21世紀を担う若者たち、つまり中高生にしようとなった。きっと10年

後、20年後の成果も大きいだろうという思いがあったね。

三つ目は理念の見直し。当時は日本語の普及、特に外務省は普及をいったんだけど、われわれは押し付けではなくて、お互いに学び合うことが必要だろうと考えた。そうなれば、国内の高校生にも中国語とか韓国朝鮮語を学んでもらうのがいいんじゃないか。それでまずは国内の中国語教育事業を始めることにした。

この三つのことで、財団の舵を大きく切ったんだよね。

そして私自身の課題としたのは、理想的な職場づくり。特に当時は雇用機会均等法が施行されて女性の社会進出が注目されていたこともあって、女性が働きやすい職場をつくりたいと思ったね。じゃあ働きやすい職場って何だろうって考えると、メンバーが信頼し合っていることが基本にあって、一人ひとりが出勤してくること自体が楽しくて、働き甲斐があると感じられること。具体的には、有

給休暇を100%消化してほしいと思ったし、オフィスレイアウトにもこだわりたかった。女性に対しては子育ての支援をちゃんとやりたいと思った。だからそのとき、子育て中のスタッフに対しては在宅勤務も認めたよ。とにかく、フォーラムはソフトウェアが命だから、勉強したり考えたりする時間や環境がどうしても必要だと思ったわけ。

私はフォーラムに入るまでは講談社でずっと営業をやってきて、国際交流なんて考えたこともなかった。最初の4年は国際交流基金や日本語教育、中国語教育をはじめいろんな分野の第一線で活躍している人を訪ねては教えを請い、アドバイスをもらった。そして事務局長になって、自分にできることは率先垂範しかないと思っていた。思い切りやらせてくれる出捐企業の方がたの思いに報いるためにも、フォーラムのやるべきことについていろいろなアドバイスをくれた人たちに恩を返すためにも、私ができることは何かと考えると、まずは365日、全身全霊、国際文化交流に打ち込むことだと。

何か特技があるわけじゃないから、せめて、という思いだった。

こういう覚悟をしたのは、財団設立10日前に惟道社長がお亡くなりになったことが大きい。志半ばにして亡くなった無念さはいかばかりだっただろうと。だから惟道社長の無念さ、志を無にしないためには、私一人ぐらい、フォーラムに殉じて、骨を埋める覚悟をする必要があるんじゃないかって思ったんだよね。

気持ちが通じたことで得た自信

いちばん忘れられない事業をあえてひとつ挙げるとするならば、中国のエリート校である外国語学校の中高校生を対象にした日本語弁論大会。エリート校の外国語学校6校（上海、深圳、長春、鄭州、南京、武漢）を対象にしたもので、素晴らしいスピーチばかりだったんだけど、2回目から、これは自分が思い描いていたものと違うと思うようになった。代表で出る生徒はもちろん、学校の名誉をかけた先生の競争はすさまじかった。あまりにも周到な準備をしてくるので、お題をあらかじめ出さなくて、その場で与えるような工夫もしてみた。すると、みんな五つぐらいタイトルを予測して、それぞれでスピーチ原稿をつくって、全部覚えてくるわけ。でも予測が外れたらぼろぼろになってしまう。入賞しなかったときの生徒と先生の落胆振りはあまりにも激しかった。学習奨励のつもりがものすごい負担を先生にも生徒にも与えているんだと思ったね。自分たちは何のためにこんなことをやっているのかと回を重ねるごとにその思いは強くなった。

この弁論大会を開催するのに、長春外国語学校の劉元松校長にすごくお世話になって、第1回の会場を引き受けてもらった。次年度以降も開催したいとおっしゃっていたのを、各外国語学校を巡回して、5回目にまた劉校長に戻ることで納得していただいていた。だけど、4回を終えたところで、弁論大会に代えて教師研修を開きたいと劉校長に話したら、こちらの気持ちをよくわかってくれた。教師研修にしたのは、「母鳥を育てていけばひよこ

は育っていくんじゃないか」と思ったからだよね。

この一件からいろんなことを学んだ。まずは劉校長の教育者としての子どもたちへの姿勢、人間としてのスケールの大きさ。心から尊敬できる中国の人に出会ったことは自分の人生にもプラスになったし、自分の思いをわかってもらったことで、国際文化交流をやっていること自信にもなった。

次に中国の底力を見たこと。弁論大会に参加する生徒や先生の気力を目にして、中国って大きなあと、私が予測していた10倍も100倍もすごい力を持っていると感じたね。

そして己の浅はかさを痛感。弁論大会はどこにでもあるし、優秀な学習者を励ましたいと、単純にそう思っていたけれど、深く考えないとただ負担を強いてしまうことになる……。

この事業はその後フォーラムでやっていくのに大きな意味もあったと思う。

心から尊敬できる中国の人に出会ったことは自分の人生にもプラスになった



『Teenage Tokyo』。ストーリー漫画で日本の高校生の日常生活を紹介した。

大きな決断

いろいろと事業を絞る過程でいちばん決断が必要だったのは、『ワールドプラザ』の休刊。創刊時は類誌もなかったし、隔月刊とはいえ、提供する情報には価値があったと思う。そのうち国内の国際化の状況も変化し、さらに自治体国際化協会（CLAIR）の機関誌が出てきた。そうなると太刀打ちできない。資金の問題も大きかった。でも、外務省は継続を希望するし、『ワールドプラザ』に関わるフリーのライターもいるし、大きな柱の出版物をやめることへの抵抗は少なからずあった。

これと並行して、世の中はデジタル化へと入っていきこうとしていた。フォーラムはその先陣を切ってデジタル化に踏み切ることにした。ワープロが主流で、パソコンは数台あるだけという状況から、一人1台のパソコン、ネットワーク化を一気に進めることにしたんだよね。でも、『ワールドプラザ』をやり



1996年に中国長春で開かれた中高校の日本語教師研修会。

ながら、デジタル化を進めることは財政的に無理。インターネットが『ワールドプラザ』の役割を果たすだろうという予測もあった。そして、事務局長になってからずっと考え、6年目の1996年に幕を下ろした。

もっとやりたかったこと

やりたくてできなかったのは、戦略的な図書寄贈。多くの図書を寄贈したけれど（延べ180カ国、約81,000冊）、寄贈した図書の多くはこれぞ日本紹介の本。それが悪かったわけではないけれど、高校生の民間大使を世界で育てるつもりで、そのために必要な図書を考えて、相手の実情に合わせて本を選択して贈りたかったし、今でもできるならばやりたいね。そのためには強い思いと覚悟が必要。例えば、岩波書店は戦前から中国の5大学に

新刊全点を寄贈し続けているんだけど、それは創業者の日中の親善を願う熱い気持ちが歴代引き継がれてきているんだよね。今だったら、電子書籍・雑誌の可能性は大きいと思う。

それから極東ロシアの日本語教育もやりたかったという思いがあるね。1992年に外務省から強く要請されて、日本語助手をサハリンに派遣したことがある。その当時、極東ロシアに送ることは本当に毎日がびくびく、祈りの連続。どうぞ無事に帰ってくださいって。このときは、2年目からはかの機関に託した。当時はこの事業をやる力も経験もなかった。今ならできるのではないかと思う。

自分にとって、図書寄贈も日本語教育も手段、最終的には人物交流にいかなくちゃいけないと思う。その思いは今も当時も同じ。

事務局長になって7年。高崎さんにバトンタッチ



アメリカ・ウィンスコンシン州アップルトンのチルドレンミュージアムに小学生の写真パネル「けんたろうくんの一日」やランドセル、筆箱などを寄贈した。左は高嶋伸和常務理事、右は伊藤幸男米国代表連絡員（ともに当時）。

することになった。私としてはまだやりたいこともあったけれど、高崎さんはあの時代に中国語を大学で専攻していて、フォーラムにとって最高の人選だったと思う。 FT



高崎 孝

Takasaki Takashi

1998.4-2003.3

「継続」への ささやかな力添え

在任中のおもな事業：写真教材「であい：7人の高校生の素顔」作成、高校生のフォトメッセージコンテスト実施、中国中高校日本語教師研修会実施、中国中学・高校生用日本語教科書編纂事業への支援活動、日本の高校生への中国語・韓国語教育支援活動

私が事務局長になってすぐに頭を抱えたのは財政の問題です。もともと基本財産を20億円に設定したのは、金利が5～8%などという1980年代の想定ですからね。だけど、私が入った98年は失われた10年といわれ始めたところで、不景気が慢性化して、金利もゼロに近かった。20億円あっても金利だけではもたない。したがって、寄付を出捐企業に求めるのももちろんのこと、そのほかの支援者もさがさなければならぬ。例えば、三菱国際財団（現、三菱UFJ国際財団）や東京倶楽部。もちろん相手側の目的に合致しなくてははいけませんから、中国の子どもたちに日本語を教える友好的な活動をやっていますなどというプランを提出して、審査をうけて助成金をもらうんですね。

メインの出捐企業から寄付をもらうのも苦しかった。社会全体が不況ですし、さらに出版業界はもっとダメージ大きかったですから。予算編成



の季節がくるとイヤな感じてした。常務理事の高嶋さんと2人で折衝するんですが、お金を出すほうの立場もわかりますからね。そのたびに思い出したことは「継続は力なり」。これは、私が事務局長の任をうけたときに野間佐和子会長（出捐企業の社長としてでしたけれど）にいわれたことばなんです。「非常に規模は小さい財団ですけども、やっている事業はしっかりしています。続けることに意味があるんです。継続こそ力なりです」。今でも耳に残っています。

大変だったがやり甲斐があった

最初に行った出張は1999年7～8月に中国東北3省（吉林省、黒龍江省、遼寧省）の3カ所で行われた中国中高校日本語教師研修会です。スタッフが苦心して編集し、日本で印刷製本したオリジナル教材をANAが輸送してくれたんですが、遼寧省大連の税関でとめられるという事態になりました。中国は出版物に対する統制が非常に厳しい。勝手に印刷物を作って人民に配っちゃいけないわけですよ。フォーラムに来る前に出版社で中国の著作権の仕事にも携わっていたから、ある程度わかっていたんですが、まさか研修会のわずか150部程度のテキストにまで適用するとは思わなかったですね。結局テキストは、大連でザラ紙に印刷しなおしました。

この研修会に行ってみてよくわかったのは、中国の日本語教師がおかれている環境が悪かったということです。先生方が教える日本語や教授法のレベルが私の想像よりもずっと低かったんですね。



盃を交わすことで、距離はぐっと縮まる。

本当の交流で使う言語は、
その土地の人たちの
ことばじゃないでしょうか

つまり、先生方は研修をうける機会がない、支援態勢も教材も貧弱だった。そんななかで頑張っている先生が大勢いるので、大変感心したおぼえがあります。そういう状況ですから、フォーラムが提供する研修はとても大事なものだし、先生たちの感謝の気持ちも一入^{ひとしお}だったようです。

翌年から内モンゴル自治区でも開催することになり、12月に準備のために出かけました。氷点下30度の赤峰市で校庭に水をまいて凍らせたスケートリンクで校長先生や生徒たちとスケートをしました。また教育関係の地方の要人と会食し、お酒を酌み交わしたりもしました。善いか悪いかは別にして、中国、特に地方の場合、いっしょに仕事をしようと思ったら、そういうことをやってお互いにうちとけて、腹を割って話せる仲にならないといけませんね。まして対外国事業となるとあの国では必ずそれなりの役職者に認知されている必要があるわけですから。こちらも事務局長くらいは出ておかないといっさい前に進まないんです。

お互いの言語の存在意義

そうやって研修は広がっていきましたが、その一方で、1980年代の日本語ブームはとうに過ぎ去



韓国語教師研修会がきっかけとなって教師ネットワーク JAKEHS が誕生した。



1997～2006年に実施した「高校生のフォトメッセージコンテスト」の入賞作品などを写真集にまとめた。

り、中国でも日本語を教える学校は減少していってました。世界の動きを見ると仕方ないことでしょうね。だからといって、英語だけが外国語というのはどうなのでしょう。日本でも然^{しか}りです。複数の民族が一堂に会して何かをやらなきゃいけないのが当然の時代ですから、共通言語がどうしても必要です。それが英語なのはいいと思います。しかし本当の交流で使う言語は、その土地の人たちのことばじゃないでしょうか。

フォーラムに来た後、中国で日本語教育をやっているだけでなく、日本国内の中国語教育事業もやっていると知って、なるほどと思いましたね。来る前はまさか中国の日本語教育とか日本の中国語教育などをやっているところだとは思っていませんでした。だって、「フォーラム」という名前からはアジアが連想できませんでしたから。

その後間もなく韓国語教育事業も始まりました。遅すぎるぐらいだと思いましたよ。日本語と中国語の関係はしっかりできていたのに、いちばん近い国のことば、韓国語と日本語という関係はちょっと温度が低かったんでしょうね。そのときの担当者と大いにやろうと話し合ったのを覚えています。それで猛烈にエンジンがかかりました。隣国とい

うことという、ロシア語もそうなんです。何らかの事業ができればいいなと思ってはいましたが、マンパワーと資金の問題からできなかったのは残念でした。

スタッフに全幅の信頼がおけた

プロジェクトにはあまり口出しをしないことにしていました。だって、今まで積み上げてきたプロパー

の皆さんのやり方があるでしょう。私は突然ぼっと入ってきたわけですから……。でも、担当者の皆さんと行動をともにしてじきに事業への理解も深まったし、スタッフへの信頼感も強まってきました。スタッフは非常に積極的だけれども、むちゃくちゃをするようなことはなかったですからね。スタッフから学んで、方針や趣旨をよく理解した上でアドバイスはしましたよ。でも細かい干渉をしないほうが

伸び伸びできて、結果的にそれがよかったと思いますね。

たちまち5年が経ち、任期が終わってフォーラムのプロパーである中野さんにバトンタッチしました。このときは中野さんの力量もよくわかっていましたから、思い切りやってくださいという気持ちでした。 FT



中野佳代子

Nakano Kayoko

2003.4-2011.3

人をつなぐ
文化をつなぐ
社会をつくる

在任中のおもな事業: 中国の日本語教材『好朋友』の制作、「外国語学習のめやす」作成プロジェクト、世界の中高校生交流サイト「つながーる」の開発など



アメリカ・ウィスコンシン州の小学校での授業を見学。



フォーラム発足3年後の1990年、国際文化交流事業に携わっていた経験があったことから、財団運営についてアドバイスをしてほしいと頼まれ、非常勤としてフォーラムで仕事をするようになりました。当時フォーラムは講談社の関係者で運営

されていましたが、その2年後、財団の第二の創業ということで、人事・財政・事業全体を見直し、プロパー職員を採用して新たなスタートを切ることになります。そのころから私も常勤で働くようになったのです。

事業の大転換を図った1993年3月の理事会・評議員会は私にとって忘れられないものです。財団設立の趣旨は「ことばと文化」を核とした国際文化交流を行うことですが、日本語・日本文化を海外に普及することが事業の主軸でした。私は、文

文化理解や交流などの要素が入って初めて言語教育は文化交流になると思います

ひとりの資質や能力、やる気が財団全体の活動に大きな影響を与えます。個々の良さを引き出し、事業の理念を共有し実現していくにはどうしたらいいのかよく考えました。任期の後半に入ってから、スタッフから上がってきたアイデアを極力採用するようにしました。もちろん、それだけ質の高いアイデアや企画が生まれるようになってきていたということもありますね。スタッフとのインターアクションで事業が決まってきました。

プログラムは絶えず進化する

自分の思いが形になった事業といえば、2001年の写真教材「てあい」、2009年の日本語教材『好朋友 ともだち』の制作、2012年の「外国語学習のめやす」の開発ですね。後の二つは事務局長のときでもありましたが、担当のひとりという思いでどっぷり向き合いました。一つ制作するごとに自分自身のコンセプトがバージョンアップしていったのです。さまざまな事業で培ったものを「てあい」、『好朋友』に取り込み、それが「めやす」に結実したともいえます。「てあい」では「言語学習」と「文

化交流は一方通行ではなく双方向であることが望ましいと思っていました。海外で日本語教育を促進するのであれば、相互主義に立って相手の言語、とりわけアジアの言語を日本で促進していく。言語教育も文化交流の一環として位置づけて、文化紹介事業と組み合わせながら、若い世代を対象とする文化理解のための言語教育という事業領域を開拓することを当時の事務局長に提案しました。事務局長とともに理事・評議員の皆さまを訪問し、議案の説明にうかがったのを覚えています。最終的に理事会・評議員会で会長をはじめ役員の方がたの承認を得たわけですが、それ以来、事業に対して大きな責任感と使命感をもつようになりました。これは後に事業部長を経て、事務局長となった原点となっています。

「文化交流は人に始まり人に終わる」というフルブライト米国上院議員の名言があります。文化は人間が創造するものですから、文化交流は人びとの生活のあり方や考え、美意識、価値観の交流ですよね。国際文化交流事業によって人と人がつながる、つなげることが大事なわけです。そして言語は文化の中核にあるのですから、日本語なり外国語なりを学び、使うことでその言語話者と相互理解を深める、つながることが外国語教育の最終目標だといえると思います。文法や語彙をひたすら

覚えることが中心の言語教育はフォーラムが追求するものではない。もっと文化も取り込んだ言語教育。文化理解や交流などの要素が入って初めて言語教育は文化交流になると思いますし、そうすべきだと思ってきました。

しっかりしたビジョンと理念をふまえて、ほかではやっていないオリジナルな事業を開拓するスピリットを常にもっていたい。小さな組織でもキラッと光る仕事がしたい。小回りのきく民間財団には、前例のない先進的なアイデアを行動に移せるという強みがありますので、その良さを生かすことをめざしました。

事務局長になって

2003年度に事務局長になっても、事業についての思いや考え方は変わりませんでした。事業以外の総務・財務に注ぐエネルギーの比重が当然大きくなっていきました。フォーラムの強みを生かして活動できるのはスタッフ、そして事業に協力してくださる人がいるからですが、何よりも財団運営や事業に資金を提供してくださる企業や団体の支えがあってこそ話です。その方がたに対する責任は重たいものでした。

また、人を育てることを強く意識するようになりました。フォーラムは小人数の組織ですから、一人



2005年、日本語教育学習研究センターの開所式で、大連市教育局の王副局長（当時）と。

化理解」に「人間理解」を加え、この三つを学習目標とし、教材に登場する7人の日本の高校生を理解する過程で、日本語や個人の背景にある文化を学べるようにしました。こうした蓄積にもとづきながら、いま世界の教育界を席卷しているOECDのキーコンピテンシーをいち早く言語教育に取り入れ人間関係づくりをめざしたのが『好朋友』です。そしてこれは、「めやす」の枠組みにつながりました。「めやす」では、「他者の発見、自己の発見、つながりの実現」を外国語教育の理念に掲げていますが、外国語学習を教室のなかに閉じ込めずに、学んだ外国語を使っていろいろな人とつながる、自分が生きている社会とつながることをめざしました。「めやす」は、文化交流としての言語教育を形にしたといえると思います。

ただ学校現場で交流まで実施するのは大変なことですから、フォーラムが日中高校生のサマーキャンプのような交流の場をしっかりとつくりあげ、文化交流としての言語教育がもっと見えてくるのではないのでしょうか。

事務局長だからできたこと

いま挙げた三つの事業は大型の資金調達が必要でしたが、活動に必要な助成金を出してくれる財団や企業に出会うことができました。フォーラム

を信頼し、ともに夢の実現に向けて協力してくれた多くの人びとのことは一生忘れないです。とりわけ『好朋友』は日中共同事業だっただけに奇跡的でドラマのようでした。2005年のことです。中国で日本語を開講する学校が激減するのに何とか歯止めをかけようと、遼寧省の教育行政関係者と日本語教育関係者を招聘しました。一行のひとり、大連市教育局の王允慶副局長に、日中間の相互言語教育を促進し、それによって日中の若い世代をつなげたいのだと話す、わが意を得たりだと言ってくれました。「私たちがもっている権限でできることをまずやってみよう。海を隔てた子どもたちがそれで少しでも近づくなら自分の仕事、そして人生に意味がでてくる」と。中国の教育行政関係者とつながった瞬間でした。そしてここから『好朋友』の制作プロジェクトが始まったのです。

言語教育が共同体づくりに果たす役割

文化交流の観点から始めた相互言語教育でしたが、いまやグローバル社会が実際にそれを必要としていると思うんです。まさに多言語多文化社会、

そして複言語複文化の人間が求められる時代が到来していると実感しています。時代、社会の状況に合わせて意図をもった文化交流事業は何をするべきなのかをいつも考える必要があります。私はフォーラムで若い世代の外国語教育を支援する事業に従事するなかで、ひとつの青写真を描くようになりました。日中韓という東アジア共同体の構築には、土台として互いの言語と文化の理解・共有が必要不可欠です。そのために3カ国が互いの教育制度のなかにそれを位置づけ支え合うという構想でした。国家レベルの話と聞こえるかもしれませんが、一民間財団として井戸を掘り、プロトタイプを示せないか、という思いでした。土台や考え方はできたのではないかと考えていますが、今後のフォーラムに期待するところ大です。

これからもフォーラムが中心となって同じ志をもつ団体や人たちの力を結集して、行政にも働きかけていってほしいです。国内外、両方で事業を行っているフォーラムだからこそできることがあるはずです。私をずっと支えてきてくれた水口さんが新たな道を切り拓きながら、大事なミッションを果たしていってくれることを期待します。 FT



写真教材「であい」。A3判の写真シート192枚と冊子、CDからなるこの教材は総重量10キロを超える。



水口景子

Mizuguchi Keiko

2011.4-

ともに作りだす

現在進行しているおもな事業：互いのことを学ぶ中高校生の交流プログラム、「外国語学習のめやす」「好朋友」「くりっくにっぼん」活用のための教師向けワークショップの実施



事務局長になってまずやっていたのが、『外国語学習のめやす』『好朋友』を根づかせること。この二つは理念を形にしたものですが、形にして終わりではなく、現場で使われるようになって初めて目標を達成できるわけなので、それをやっていたと思ったんですね。

それと同時に、「学習のめやす」で対象とする言語を中国語と韓国語からオール外国語にしようと決めました。中国語教育事業の担当者だったときは、他の機関がやっていない中国語教育と韓国語教育に関する事業をやっているだけで意味があったのですが、事務局長になって全体を見たとき、二つの言語だけに閉じ込めてはいけなかったと思いました。だから、中国語と韓国語教育からの提言という副題をつけて出版しました。「学習のめやす」の提案を広めるためには、すべての外国語教育に携わる人たちが力を合わせたほうがいいし、「学習のめやす」はそのための共通基盤になりうると思ったのです。中国語の先生と韓国語の先生を対

象にした研修が始まった2009年にはすでにその意識は芽生えていたと思いますが、オール外国語を対象にした第一歩は、2011年夏に開催したシンポジウムでした。シンポジウムには、スペイン語、ドイツ語、フランス語、ロシア語など各言語教育の



関係者が集まりました。これが大きなスタートになりました。

2013年度から、多くの言語教育の現場で実際に使ってもらうための第一歩として、「学習のめやす」の考え方に共感する8言語の教師を対象にマスター研修を開いています。「めやすマスター」と呼ばれる先生方が今後、各地で「学習のめやす」講座やワークショップを開催していってくれると思います。

開発をインフラ整備だとしたら、私がやっているのはソフトウェアのほうですね。開発には大変なエネルギーが必要ですが、ソフトウェアにインフラ整備以上のエネルギーを注ぎたいし、必要だと思っています。

ミッションを果たすために

私たちのミッションは、多様な文化背景、言語をもっている人たちがいっしょに何かをつくったり、問題解決をしなくてはいけないこれからの時代に、いっしょにやっていける力を若い人たちに身につけてもらうことです。その力とは何かというと、コミュニケーション力、協働力、情報活用力、コラボレーション力などです。こうした力を獲得するのに、外国語を学ぶことはとても効果的だと思っています。このときに、ただ教室のなかだけで学ぶのではな

教室のなかだけで学ぶのではなく、 学んだことばを使って 人とつながることが必要

く、学んだことばを使って人とつながることが必要で、その場をつくるのが私たちの大きな仕事だと思っています。このとき同じ思いをもっている先生方といっしょに場をつくり、効果的な仕掛けをつくっていくことが重要になってきます。人と会って、あいさつをして、楽しいときをいっしょに過ごすだけではなく、自分の意見を相手にぶつけ、お互いに調整して、何か新しいものをつくる活動を入れていくなど、さまざまな工夫を考えていかなければいけません。日中の高校生サマーキャンプ、日韓の中高校生交流事業、協働を生み出すプログラムの開発事業では、言語教育や交流学習、情報教育の専門家といっしょにさまざまなコラボレーション活動を行っています。

こうした場づくりには、海外で日本語を教えている先生方の力も欠かせません。人を通して日本を発信している「くりっくにつぼん」ウェブサイトを活用して、生徒の考える力や発信力を養う授業実践をされているアメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、韓国、中国をはじめ各国の先生方と多く出会いたいと思っています。



「SEOULでダンス・ダンス・ダンス」の報告会でダンスを披露。

これからに向けて

私が事務局長になったのと同時期に、TJFは公益財団法人に移行しました。「公益」の重みは予想していた以上です。例えば、何か間違ったことをしたら法人は解散しなければならず、財産は没収されるわけです。公益とは何か、公益たるにはどうあらねばならないかを改めて問うことになりました。広く支持をもらえるよう、もっと広報もしていけないといけませんし、何よりも事業の質を高めていくことが必要だと思っています。

TJFは小さな組織です。同じ人がひとつのプログラムにずっと関わる人が多いので、知識やノウハウを蓄積して、プログラムをどんどん改良していくことはいいところだと思っています。その一方で、やり方や発想が同じになってしまいがちです。担当ではないプログラムに関わることで、新しい視点を持ち、一人ひとりがもっている力を最大限に発揮してもらいたいと思っています。そうすることが、いい事業につながっていきますから。

私たちは研究者でもなければ、教師でもありません。独りよがりにならないよう、自ら学びながら、同じ志をもった方たちとともに、子どもたちがことばと文化を学び、コラボレーションする場をつくる事業を着実に進めミッションを達成したいと思っています。 FT

編集後記

『国際文化フォーラム通信』100号を記念して、今号はこれまでとはちがうデザイン、内容でお届けします。ふだんは黒子であるスタッフの意外な一面や、歴代事務局長のインタビューを通じて、時代や社会状況に即して変わってきた事業、変わらない思いをお伝えしたいと思ったのです。

これまで『国際文化フォーラム通信』では、事業の様子だけでなく、私たちが考えていることやめざしているものを、その時々教育現場での関心からめながら取り上げてきました。ICTを特集した93号には、「ICTに関連する公開授業や研究会でぜひ配布したい」と要望が寄せられたり、21世紀に必要な力を育てるためのアプローチについて考える特集を組んだ96号では、多くの方から「参考になった」「刺激になった」と感想をいただきました。一つひとつのコメントが、とても励みになりました。

昨年6月に開設したfacebookの公式ページでは、スタッフが日々何をしているか、どんな人たちと出会っているかなどをリアルタイムでお伝えしています。来年1月にはメールマガジンを創刊し、TJFが主催、協力する催しの情報はもちろん、事業に関連するニュース、ウェブサイトの更新も発信していきます。もちろん印刷物も引き続き活用することになりません。これからもさまざまなメディアを活用して、皆さまとつながっていきます。

私たちのミッションに共感してくださる皆さまとつながるのは、今号で紹介したスタッフ10名十…です。得意なこと好きなこともちがう、考え方もさまざま、でも大きな目標を共有しています。少ない人数であっても、そんな集団だからこそ、時代の変化を踏まえ、新しいことにチャレンジできると確信しています。ミッションを達成するために、天空を流転する星のごとく事業を進めていきたいと思っています。

これからもご指導、ご協力をよろしくお願いいたします。

水口景子

公益財団法人
国際文化フォーラム
〒112-0013
東京都文京区音羽1-17-14
音羽YKビル3階
Phone: 03-5981-5226
Fax : 03-5981-5227
E-mail : forum@tjf.or.jp
www.tjf.or.jp
2013年12月発行

特 集

歴代事務局長
インタビュー





特
集

10×10 +10...

発行人・内藤裕之／編集人・水口景子
デザイン・gfd (山本義明)
印刷製本・凸版印刷 (株)
校閲校正・天山舎
写真・大木茂 (ネパール・ポカラで撮影)

私の偏愛

リュックサックを愛用しています。2005年に北京に留学したときに重たい教科書類を持ち歩くことになりました。周りの学生を見てみると、リュックサックを利用しています。これはいい、と購入しました。使ってみると、非常に軽くて便利なわけですよ。今までなぜ使わなかったんだろうと思いましたね。今、愛用しているのは三つ目。もちろん背広にもコートにもリュックです。妻は、みっともないからやめろと最初のうちは言っていましたが、いまではあきらめたようです。この間モーニングを着る機会がありました。さすがにこのときだけはリュックはやめておきました(笑)。



5

〇〇なら負けません!

変な人といわれる人とうまく付き合うこと。組織からはみ出してしまうような人、無口でとっつきにくいといわれているような人とうまく付き合って、組織のなかでその人が生きるように組織の和にいれることに長けていると思います。

9

誰にもいえなかった失敗

北京大学で4ヵ月、一所懸命勉強した中国語をその後活かす機会がないこと。というより、中国語を使う勇気が、からきしないことだろうと思います。

6

事務局長になったら、これをやります!

ロシア人の高校生の日本語教育促進事業!そして、次に日本の高校生のロシア語教育促進事業をやりたいです。ロシアは隣国であり、一般庶民の日本への関心は非常に高いといわれます。大使として1994年から97年までロシアに在勤しましたが、そのときからその熱を感じています。

10

実は私、こんなでした

在外公館にいたときの写真です。外交官は天職だったと思っています。生まれ変わっても、外交官でありたいという気持ちが強いです。

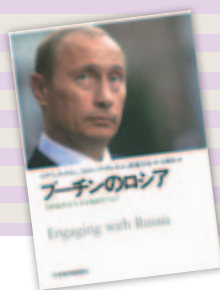


8

サイコーのオフィスランチ

西新宿のオフィスに、北京大学の留学生10人を招いて、いっしょに食べたお弁当です。2005年に4ヵ月ほど北京大学国際関係学院に中国語習得のため留学していました。年齢70を過ぎての留学でしたが、お隣の国を改めてより深く理解したいと、中国語の四声と簡体字と格闘の日々でした。このとき大変お世話になったのがK助教授でした。入学の手続きからアパート探しまでしてくれました。そのKさんの教え子たちが北京大学と姉妹関係にある早稲田大学に集団留学することを知って、帰国後に招いたというわけです。非常に懐かしい思い出です。

2



渡邊幸治
日本経済新聞社(共著)

渡邊 幸治

理事長



私が書いた記事

1

『事業報告2005-2006』に書いたあいさつ文です。現在も良好とはいえませんが、その当時も日中、日韓関係は険悪な状態にありました。そんなとき、知人がこんな話をしてくれました。ホテルのレストランで話の相手をしていた小学1、2年生の少女が突然、真顔で「日本人は鬼子と教えられたけど、おじちゃんはどうじゃないのね」といって立ち去ったと。これこそが草の根外交の原点だと思い、このようなふれあい、出会いを積み重ねることが重要だと思いました。

涙したあの日

TJF設立20周年のレセプションには、言語教育や国際交流などで活躍されている方をはじめ、実にさまざまな分野の方々に出席していただきました。皆さまから発せられる熱気やTJFへの期待を感じ、TJFは小さいながらもパイオニア的な役割を果たしてきたのだと、いたく感動したことを覚えています。



3

4

びっくりした出来事

2012年3月3日に開かれた『外国語学習のめやす』の完成記念シンポジウムに非常に多くの方たちに集まっていたことです。私も完成したときに読みましたが、相当難解な説明でよくわからない。これをどれだけ多くの人が支持してくれるのか、シンポジウムには数十人しか集まらないのではないか、と実は少々心配していたのです。それが、開会のあいさつをせよということで、皆さんの前に立ったら、ぎっしり200人を超えて会場が満員なわけです。率直に言って、これには本当に驚きました。

7

漢字一文字で表すと…

組織ではやはり「和」を尊ぶことが大切です。常にめざしてきたことです。

和



3

涙したあの日

「SEOULでダンス・ダンス・ダンス」の参加者から、御礼のコルクボードを帰国後の報告会で貰ったとき。

2

サイコーのオフィスランチ

フォーラムに着任して、初めて業務執行理事と事務局長と食べた音羽のランチ。猛烈な酷暑日だったので、3人のうちの誰言うともなく、ビール付きに……。

午後からのその日の仕事は、諸規則のチェック。就業規則第13条を見ていて、ドキッ。第一項には、こうありました。「次の各号に該当する者に対しては、出勤を停止し、または退勤を命ずることがある。(1) 酒気を帯びるなど、風紀秩序を乱す恐れのある者」ワオッ……。

謝

漢字一文字で表すと…

謝罪の謝になるか、感謝される謝になるか、神のみぞ知る、です。

7

4

びっくりした出来事

実は教育フォーラムだったこと。

9

○○なら負けません!

知らない街で、美味しい店を見つける勘、なら負けません。かつては山手線各駅すべてに、一軒は、お気に入りの飲み屋がありました。いまスマホの電話帳には、お気に入りの店が、159軒。フランクフルト、ミュンヘン、パリを含め、地方に行ったら行きたい好きな店が、180軒入っています。これが多いのか少ないのかはわかりませんが、ほとんどは、足で稼いで、見つけた店です。構えと、お品書きから、手応えのありそうな店を選んで、チャレンジした成果です。

8

実は私、 こんなでした

短期で外国人語学コースに通っていたときの独・マンハイム市電の定期。こんな時代もあったんです。



10

事務局長になったら、 これをやります!

合宿。とことんみんなで語り明かしてみたいという、青い考えです。

誰にもいえなかった失敗

こんなにプロ集団だったとは知らず、就任後初めての会議の自己紹介を、韓国語でしたこと。恥ずかしい。ドイツ語にすればよかった……………それも南部訛りでやれば完璧だったはず。

6

1

私を書いた記事

當作先生の著書『NIPPON3.0の処方箋』の帯に書いたコピー。どんなことばかは、本屋さんで見てください。



内藤裕之

常務理事



5

私の偏愛

☆旅行や出張で出かけた国の紙幣やコインのきれいなものを全種類集める。特に最小額が大好きで、貳角紙幣や各国のユーロコインを集めては、喜んでます。ユーロは紙幣は一緒ですが、コインは国によって、裏面が違うのです。

☆市場やデパ地下でその土地にしか出回らない、知らない食材を見つける。特に魚介類とキノコ。オシツケ、オジサン、八角、キュウリウオ、ヅ蟹、栗蟹、海茸(キノコではありません。貝です)、イタヤガイ、夜光貝、アミカサタケ、ラクヨウ、トラマキタケ、クリタケ、ヤマブシタケ、香茸……。

☆海外旅行した国の数は、独逸、澳太利、瑞西、盧森堡、葡萄牙、英吉利、仏蘭西、伊太利亚、丁抹、阿蘭陀、瑞典、諾威、芬蘭士、拉脱維亞、蘇聯、露西亞、洪牙利、土耳其、韓国、中国、香港、台湾、加奈陀、瓜姆島。24カ国・地域を数える。独逸語圏を旅した回数は覚えていないくらいなのに、亜米利加に行ったことは、瓜姆島以外一度もありません。布哇すらないのです。瓜姆島はかつては信託統治領で、今では準州となっていますが、亜米利加と言うには、あまりにも、ですよ。

☆はくつる、ゆうづる、はつかり、あけぼの、北陸、出雲、紀伊、銀河、あさかぜ、さくら、みずほ、富士、はやぶさ、あかつき、なは、彗星、明星、金星。みんな廃止されてしまいましたが、懐かしい夜行寝台列車です。乗ることが出来なかったものも、ヘッドマークの撮影だけはしました。それぞれ東北本線經由青森行・常磐線經由青森・秋田・金沢・浜田・紀伊勝浦・大阪・博多/下関・長崎/佐世保・熊本・日豊本線經由西鹿兒島・鹿兒島本線經由西鹿兒島。あかつきより後の列車は、東海道新幹線から乗り継ぐブルートレインや電車特急の寝台車で、新大阪駅から、あかつきとなはは西鹿兒島、彗星は宮崎、明星は熊本、金星は名古屋駅から博多行きの変り種でした。



水口景子

事務局長



★



★

20
年目

9

○○なら負けません!

日本の高校の中国語教育のことならお任せ。頭の中にあるコンピュータがお答えします。不來方高校や柴島高校もすらすら読めます。会ったことのある中国語教師は300人を下りません(ちょっと大げさ?)。先生方にはブルドーザーなどといわれていますが、私はずっとサポーターでいると思っています。

誰にもいえなかった失敗

1996年冬に、中国の東北部の3都市に出張しました。最初の大連の宴会で出てきたのが白酒、アルコール度数38度の蒸留酒です。ここで飲んだのは小さなグラスに、一、二杯。次の瀋陽ではもう少し多くて三、四杯。そして最後は吉林省延辺朝鮮族自治州の州都延吉での宴会でした。

私を含めて11人、円卓に座った人たちが勤め上手なこと。結局テーブルの人全員と乾杯し……。気がついたらホテルの天井が見えました。楽しい宴会の後半のことはまったく覚えておらず、飲みすぎで意識を失うなんて初めてのことでした。私の呼び名はその日から「酒口」に変わりました。翌日、飲みすぎには気をつけようと心に誓いましたが、今でも記憶があやふやなことが時々あります(笑)。

6



びっくりした出来事

フォーラムが調査を委託した研究所にいたことです。中間報告を提出するためにTJFの事務所を訪れると、打ち合わせ中にコーヒーを持ってきてくれるのはいつも男性スタッフでした。偶然だったのかもしれませんが、それまで経験した職場ではいつもお茶出しは女性だったので、へえーっと思ったことを覚えています。

4

涙したあの日

フォーラムで働き始めて3年目。高校中国語教育に関する調査をまとめた報告書をつくることになりました。原稿を書くところから、一冊の本として出版するまでの工程に関わる、私にとってかなりチャレンジングな仕事でした。原稿の締め切りが近づくにつれて、キーボードをたたく手が止まり、だんだん煮詰まってきます。もう自分でもどうしたらいいのかがわからなくなり、誰もいないオフィスで何度も涙を流しました。その後先輩に助けられ、なんとか原稿が完成し、出来上がった本を手にしたときに流したのはうれし涙でした。



3

7

漢字一文字で表すと…

朗の主たる意味は二つ。その一つ、「明るくて快活である。声が明るくて大きい」はそのまま当てはまると思っています。もう一つ「清らかにすんでいて、くもりがなく、すがすがしい」はめざしたい私です。

朗

8

実は私、こんなでした

旦那様とは、大学時代からの付き合いです。今と違って(?)少しはかわいげがあると思いませんか。彼との付き合いもかれこれ35年になります。仕事を続ける私の最大の理解者です。



私が書いた記事

『国際文化フォーラム通信』に掲載していたコラム「日本の高校における中国語教育の現場から」の初回の記事です(コラムはno.22に始まり、「アジアのことばを学ぶ」に名前を変え24回まで6年間継続)。学校に取材に行き、写真を撮影し記事を作成する。しかも初めての署名記事でした。900字足らずの記事を作成するのに、何時間、いえ何日もかかりましたが、自分のなかでは今でもベスト1です。

1

サイコーのオフィスランチ

鳥取で食べた岩牡蠣。その日はバスで神戸へ向かう予定でした。出発時刻ぎりぎりになったとき、匂である岩牡蠣をどうしても食べたいと、いきなり駅デバまで走っていった上司。戻ってきた彼女が手にしていたのは、食べやすいように切ってもらった岩牡蠣と名産のちくわ、それにビール。美味しかった!!!

2



DeAGOSTINI刊

10

事務局長になったら、これをやります!

本当はTJFの事務所を東京以外に置ければいいだろうと思います……。それは難しいので、仕事の対象地域に期間限定のSOHOを構え、仕事をしながら自己研鑽ができる制度はできないかなと考えています。

5

私の偏愛

ロースハムの脂身。小さいころからハムが出るとまずここから食べていました。やっぱりあの白い部分が多いロースハムが最高です。理由はただ一つ、おいしいから。ただし、その積み重ねがここ最近のコレステロール値上昇につながっていることは間違いありません。でもやめられないんです。



©厚木ハム

喜

漢字一文字で表すと…

おもしろいねー、
楽しいねー、
おいしいねー、
で毎日生きてます。

7

事務局長になったら、
これをやります!

毎日、事務所へ来るのが楽しみではないくワクワクを実現する! 〈権限委譲〉+〈責任〉+〈評価〉の仕組みをつくって、さらに活気に満ちた組織をつくる。

10

〇〇なら負けません!

物事をわかりやすくシンプルに説明すること。興味をもったらとことん追求すること。

9

サイコーのオフィ斯拉ンチ

平日のランチは、いつもの店のフツの定食が一番。ということで、僕のおすすめは事務所近くの中国料理店・永盛昌の炸茄盒(チャーチャーホウ)。中国の北の地方の料理で、見た目はサツマイモの天ぷらのよう。ガブリとかじると、皮、茄子、豚肉が層になっていて食感が楽しい。そして、真ん中には、なんと甘い餡子が隠れている。これが、後をひくおいしさの秘密!



2



★



★

藤掛敏也

私が書いた記事

『Takrabako』の Japanese Culture and Daily Life コーナーで、取材して記事を書いたのが良い思い出です。

1

▼まんが喫茶

渋谷のまんが喫茶へ取材に。写真のモデルにも。

<http://www.tjf.or.jp/eng/content/japaneseculture/27mangakissa.htm>

▼アキバから、世界へ!

アキバ系に、電車男。秋葉原ブームでした。

<http://www.tjf.or.jp/eng/content/japaneseculture/30akiba.htm>

涙したあの日

3 高校生が友だちをモデルにした写真とエッセイで参加する「高校生のフォトメッセージコンテスト」(1997～2006)を担当しました。毎年同じ撮影者とモデルで参加してくれるペアがいました。1年目は喜びと安心感に満ちた2人だけの世界、2年目はその世界が笑顔でいっぱいになりました。そして、3年目に届いた写真には、学園祭でモデルの子が撮影者とは別の友だちと笑顔で並んで写っていました。この写真を見たときに、僕はたまらずトイレに駆け込んで号泣しました。2人が抱えていた辛い気持ちが何だったのか僕にはわかりませんが、今は気持ちが晴れて、外の世界に向かって歩み始めているんだと、ずっと写真を見てきた僕にはすぐにわかりました。2人の成長を感じて、本当にうれしかったのです。フォトメッセージコンテストで実感したのは、誰かに認められることで生まれる力の大きさでした。



実は私、こんなでした

8 小学生のとき、リトルリーグで野球をしていました。体が小さくて、足が遅い、器用さもない。あまりのダメっぷりに親がコーチをかってでて、結局やめたくてもやめられない状態に。日曜日の朝、雨が降っていて練習が中止になるのが、本当にうれしかった！僕、野球に1mmも興味ないです。インドア派です。

誰にもいえなかった失敗

6 NHKの番組で「高校生のフォトメッセージコンテスト」の告知をしてもらえることになった。視聴者からの問い合わせのため、事務所に待機する段取りになっていたのだが遅刻。結局、放送が中止になってしまった。たくさんの方のご好意が僕の遅刻のせいで全部無駄になった。自分が情けなくて、恥ずかしくて、もうどうしていいかわからずに、床屋で頭を五分刈にした。それを見た家族から、「五分刈で反省なんて、子どものすることだ」と冷たくなじられた。ってことは、もう昔の話。

Coffee Time



私の偏愛

茶道家のような精神と科学者のような探究心で、コーヒーを淹れて飲むこと。お湯をわかして、豆を挽いて、自分と相方の2人分のコーヒーを淹れる。毎日の生活の中で欠かせない、もっとも心が落ち着く時間です。

びっくりした出来事

4 写真教材「であい：7人の高校生の素顔」の取材で訪れた北海道の農場では、カルチャーショックの連続でした。酪農の現場は過酷です。まず驚くのは、牛がすごく敏感で繊細なこと。牛舎に入ったとたん、巨峰ぶどうのような黒い目でいっせいに牛たちがよそ者の僕を見つめてきます。獣医さんが牛のお尻(?)に手をつっこんだりしている横で、「牛乳を出している牛はね、みんなメスで妊娠しているんだよ。人間が計画的に妊娠させているんだ。朝晩必ずお乳を搾ってあげないと牛は死んじゃうんだよ」などと聞かされて、頭は真っ白。生々しさに圧倒されて、取材どころではありませんでした。でっかいどー北海道。自分の人間の小ささを痛感しました。



室中直美



サイコーのオフィスランチ

2

サイコーのランチにはまだ出会っていないのですが、事務所が西新宿の高層ビル街にあったころ、ちょっとイヤなことがあったとき、疲れているけどもうひと頑張り必要なときに、お隣のハイアットリージェンシーの「酒肴 omborato」で2,000円ほどのにぎり鮭を食べてプチ贅沢をしていました。新宿中央公園に面した大きなガラス窓のあるヌケのいい空間で、鮭を待ちながら外の緑をぼんやり眺めるのが好きでした。



誰にもいえなかった失敗

20代の終わりころ、ある大先生との会話中に、単なるノリで「〇〇先生って、△△界の黒幕ですよね〜!!」と口走ってしまい、冷ややかな沈黙が流れたこと。こんなことを言っていた先生に何と答えていただきたかったのか!? おもしろいジョークだとしても独りよがりな勘違いをしていたのか!? 思い出すたびに恥ずかしさで悶絶します。寛大な先生は、もちろんその後も変わらず TJF の事業をサポートしてくださっています。

6



私が書いた記事

1

「であい：7人の高校生の素顔」(2001年発行)のマイストーリー。文章はまだまだ稚拙ですが、取材にも書くことにもこれまででいちばん時間とエネルギーを費やしました。高校生に密着して何度も学校や家に行き、ときには自宅に泊まってもらって(女子のみ!)インタビューしました。思春期の高校生たちへの取材は、相手から常に「この人は信用しても大丈夫か。正直に話をさせてかえって自分が傷つけられたりしないか」と探られている感覚がありました。かれらに安心してもらうために、まず自分自身のことをさらけ出して話すことにしました。取材が終わると毎回疲れ果てていましたが、そうしないと、かれらが大事に思っていること、人間関係や将来について揺れ動く気持ちなどを、こぼにしてもらえないと感じていたのです。ご家族や学校の先生、地域コミュニティの方など周囲の方々にもお話をうかがい、撮影にご協力いただきました。高校生から大人までさまざまな方たちと知り合い、お話をうかがうおもしろさを感じる一方、相手と関係を築きながら話を引き出す過程では自分の力不足を突きつけられて、たくさん落ち込みました。いろんな方と深く関わらせていただくなかで少しだけ成長したかな、と思います。

びっくりした出来事

あれは、たぶん1999年の秋。わたしとN事務局長は、マンハッタンの路上でタクシーを降りた。わたしにとって初めてのニューヨーク！ 趣のあるビルが建ち並ぶストリートをイエローキャブが走っていく。「映画みたいで素敵ですなぁ！ Nさんっ！」振り返ると、そこにN事務局長の姿はなかった。必死でN事務局長を探す。N事務局長は車と一緒にストリートのご真ん中を疾走していた……。いったい何が起きているのか訳がわからなかったが、とっさに追いかける。意外と（ごめんなさい）足が速いN事務局長。かつて短距離走の選手だったわたしもなかなか追いつけない。事業に多額の助成をしてくださっている団体のトップの方とのアポイントの時刻が迫っていた。焦る。すると、200mほど前方でN事務局長が走るのをやめた。信号待ちのタクシーに近づき、窓を叩いている。ほどなくタクシーのトランクが開いた。次の会合の資料が入ったキャリーケースを先ほど降りたタクシーに忘れていたのでした。後日、「室中さんったら、わたしのことを走って追いかけてくるのよお。ウフフー」っておっしゃっていましたが、そりゃ追いかけますよ！

4



実は私、こんなでした

「ことばだけでなく身体で表現できる人になりたい！」と、太鼓、琉球舞踊、沖縄の唄三線、日本の民俗芸能の踊り、中国舞踊などなどいろいろ手を出してきました。今は、夢やぶれ……。

8

涙したあの日

基本的に、仕事で起こるアレコレには、怒るか、笑うか、コーフンするか。あんまり涙は流しません。可愛げがなくてすみません。でも、最近では加齢で涙腺が緩んできたのか、交流プログラムの最終日に高校生たちが抱き合っただ泣きしている様子などを目撃するとウルウルしてきます。若いっていいですねー。

3

○○なら負けません！

地図 love 度。日本地図でも世界地図でも鉄道地図でもフライトマップでも、地形を俯瞰して眺めたり、細かいまちの名前を一つずつ追ったりしながら、何時間でもニヤニヤしていられます。



漢字一文字で表すと…

車でも電車でも飛行機でも船でも、移動している時間が子どものころから好きです（通勤、通学は除きます）。なぜだかわからないのですが、定期的に移動する時間をもたないと窮屈な気分になってきます。これまでの人生では、すべてを自分で選んだわけではありませんが、鹿児島→兵庫・大阪→東京→中国→東京と生活の場が移ってきました。また、「やりたいな」と思いついてしまったことは、行動に移さないといやなタイプです。



私の偏愛

眼鏡のフレームとレンズの間の細いミゾにたまった汚れを、紙片の角を使ってほじくり出すこと。紙片が絶妙の角度でミゾに入り込み、すっと黒い汚れの固まりがすくい取れたときは、一人、小さな達成感と喜びに浸ります……。

5

10

事務局長になったら、これをやります！

テクノロジーを駆使しつつ、自宅、カフェ、旅先など、さまざまな場所で仕事ができるようにしてみたいです！ 四六時中仕事をしたい、という意味ではありません……。



8

実は私、こんなでした

大学1年生のときだけ所属していた競技ダンス部。新人戦では最下位で入賞しました。文化部系のサークルだと思って入ったら、バリの体育会系でした。

9

○○なら負けません!

自慢じゃありませんが、方向音痴なら負けません! 地図が読めない女を地でいきます。大学に上がってからうすうす気づきはじめてんです。教室間の移動も自転車を利用しないといけないほどキャンパスが広くて、しょっちゅう迷っていたからです。大きなデパートで買い物をしようものなら、どのドアから入ってきたのかわからなくなりますし、行きはよいよい、帰りは怖い、ですね。車の運転も数年間していたのですが、向いていないことを自覚してからペーパードライバーに甘んじています。何度も走った実家までの道をどうしても覚えられないようでは話になりませんね。たかが方向音痴されど方向音痴。責められたり、笑われたり、同情されたりもしてきたけれど、一種の個性であると最近開き直っています。仕事をする上で不便極まりないのですが、綿密に行き方を調べたり、まめに道を尋ねたり、時間に余裕を持って出かけたり、タクシーを利用したりと工夫して生きています。はい、方向音痴です。以後、お見知りおきを!



涙したあの日

たくさんありましたね。初めて関わった「中国の中高校日本語教師研修会」の修了式、現地事務局を手伝ってくれたボランティア教師と研修会の成功を喜び、別れを惜しんだ涙。初めて招聘した中国の教育行政関係者との懇親会、日中のメンバーが家族のように溶け合う光景を目にし、こんなにも仲良くなれるのに……と複雑な思いで流した涙。引率したサマーキャンプの参加生徒が現地で急病から回復したときの安堵の涙……。この仕事は「心」とふれあい、「素」になれる機会が多い。そこに醍醐味があると思っています。

3

10

事務局長になったら、これをやります!

タイムカードをなくします。子連れ出勤を認めます。

漢字一文字で表すと…

なんで生まれてしまったのだろうと苦悩した10代、この先どこへ向かっていくのだろうという悲壮感と焦燥感に駆られた20代。悩む余裕もなく無我夢中で突っ走った30代。今この時、この場で、この日常を生きていることについてふと立ち止まって考えます。いろんな出会いがあったからここまで来られたんだなって。それらの出会いが「縁」であり、その「縁」によって私が生まれ、生かされ、鍛えられました。素直に感謝し、これからも委ねていきたい。随縁。

縁

7

サイコーのオフィスランチ

釜寅のウナギの釜飯。TJF会合食の定番ですが、中国からのお客様にも評判がいいですね。私なりに分析しますと、温かい、味がいい、釜入りスタイルが珍しい、栄養満点、ボリュームあり、食材が日本っぽい、お吸い物のダシが濃厚、などが人気の秘密。

2

1

私が書いた記事

TJFのfacebookに投稿した記事のリーチ数が862人となり、初めて500を超えたことが自慢！
記事は、2013年4月に筑波大学で行われた講演会「グローバル時代の日本を生きる」の報告。国際共通語としての英語の重要性や目標などの講演内容に対して、学生から次々と鋭い質問が上がりました。その頼もしい姿に感心したのです。

びっくりした出来事

出張先のハルビンで乗っていたタクシーが対向車にぶつけられたこと。幸い怪我はしませんでした。それ以来、神経質に飛ばす運転手に遭遇すると、やんわりと「すみません、車酔いするのでゆっくり走っていただけますか」と言ったりします。嘘も方便、身の安全は自分で守らなきゃ。

4

6

誰にもいえなかった失敗

出張先の北京でアワビにあたって、顔がパンパンに腫れ上がり、2日間ホテルから一歩も出られず、上司の通訳もできなかったこと。生まれて初めてアワビアレルギーであることを確信しました。



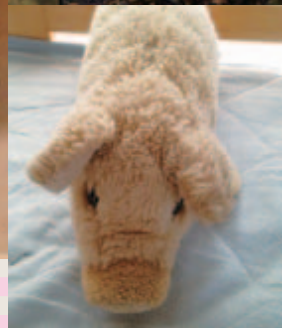
長江春子



5

私の偏愛

福々しくて愛らしい豚のぬいぐるみや置き物ですね。幼いとき、父親がスポンジでとてもリアルな豚のぬいぐるみを作ってくれたことと関係しているかもしれません。玄関にもトイレにも豚の置き物、ベッドには豚のぬいぐるみが複数置いてあります。



私が書いた記事

1

「くりっくにっぽん」ウェブサイトの「My Way Your Way」シリーズ。特に、東日本大震災の1年後に「福島へ」と題する詩を書いた中学3年生の良太くんに、詩に込めた気持ちや考えていることをインタビューした記事です。記事を読んだお母様から届いた手紙に、「因幡の白ウサギのガマの穂のようにふんわり包んで語りたくなる」と私のインタビューを評してくださいました。人の内面に迫るこのシリーズでは、インタビュー後に自分の力のなさを痛感し落ち込むことがしょっちゅうです。そんな私へのこれ以上ないほどのエールでした。



千葉美由紀



12
年目



誰にもいえなかった失敗

6

初めての中国出張。相手側のお招きでの食事。相手側の長にあたる人のあいさつがあり乾杯。次にこちらがあいさつをして乾杯。その後、歓談しながらの食事。いつもどおり、ビールをつがれると飲んでいました。宴もかなり終盤になった頃、「千葉さん、勝手に飲んでほめななんです。誰かが話をしてから乾杯をして初めて飲めるんです」
え——っ!! 早く教えて——っ!!
恥ずかしい、ごめんなさい、一人、赤面しました。



〇〇なら負けません!

テープ起こしでしょうか(ICレコーダー起こし?)。この号の「歴代事務局長インタビュー」では、合計13時間のインタビューを起こしました。1時間は大体1万字になります。このとき役立つのはフリーウェア「Okoshiyasu」(オヤジギャグな名前がたまりません)。皆さんもぜひお試しください。

9

サイコーのオフィスランチ

サイコーではないですが、自分のお手製弁当です。本を読んだり、ほかのスタッフと話をしたり、とてもくつろげる時間です。でも、たまにおいしいランチが食べたいなることも……。お誘いお待ちしております!

2

漢字一文字で表すと…

私の手はいつも暖かいです。「手の暖かい人は心が冷たいんだってね」何人に言われたことか……。そんなことないですよ。

7



3

涙したあの日

辛かった。20年史をついていた日々。特に巻末の資料編。膨大な資料との照合作業、データ整理。新宿の高層ビル26階。気づいたら広いオフィスにいるのは私ひとり……。デザインしてくれていたY氏と電話でやりとりしながら、2人とも意識が朦朧……。受話器を持ったまま意識が遠のく。忘れません、あのとき。

最初の感動の涙は、中国の日本語教師研修会に参加した先生の話の聞いたとき。TJFの研修で教師としての誇りをもてるようになったと目に涙を浮かべる姿を見て、一つの研修がこんなに人の価値観を揺さぶって、自信を与えることがあるんだと衝撃をうけました。

事務局長になったら、これをやります!

中高校生のために学校外で学べる場をつくりたいです。

10



ここで白樺の枝を売っていた



実は私、こんなでした

大きな声ではいえませんが、大学でロシア語を専攻していました。写真はモスクワ市内のお風呂屋さんの前。手に持っているのは白樺の枝。サウナで身体をたたくのに使います。ときのトップはゴルバチョフ書記長。最初で最後のソ連訪問となりました。

8

私の偏愛

27を倍、倍していくこと。27の倍は54、54の倍は108、108の倍は……とやっていると、432になります。ここでまずニヤッ。そこからまた倍、倍を続けると、3456。心のなかでニンヤリ。27の快感を超える数字はないかと、2ケタの数字を見るとつい倍、倍してしまいます。



27,54,108.....

5



びっくりした出来事

オーストラリアの学会で「くりっくにっぽん」について発表するためにAさんと出張したときのこと。大学のコンドミニウムに日本語教育専門家のOさんとAさんと私の3人で泊まりました。Oさんが帰国する前夜、話し込んだ後シャワーを浴びたのですが、蛇口が閉まらない。パッキングの最中だったのにOさんは、にっこりと私の助けに応じてくれました。力いっぱい蛇口を回して、「あっ、動いた!」と言った瞬間、止まるどころか勢いよく熱湯が噴き出しました!! 何と蛇口ごと取れてしまったんです!! シャワー室のガラスの扉はくもり、室内は熱気ムンムン。水道栓らしきものを見つけたものの、熱湯が冷水になっただけ……。すぐに警備員が来てくれましたが、全身びしょびしょになるばかり。20分近く格闘した後、電話で仲間を呼びました。ニコニコ顔で現れた警備員は水道栓を探して天井裏やら庭やらあっちこち。その間にも隣のベッドルームに浸水しています。2人は管理人を呼び出し、私たち3人は隣のコンドミニウムに移ることに。その後、もう一人助っ人を呼び、無事水は止まりました。それにしても嫌な顔ひとつせず、嫌味ひとつ言わず、なんてオーストラリアは大きいんだ〜、と思った一件でした。それにしてもこの大騒ぎの間、びくりともせず爆睡していたAさん。肝がすわってますっ。

4





8

実は私、こんなでした

高校時代、吹奏楽部でトランペットを吹いていました。この写真は当時銀座シルバーパレードと呼ばれていた催しに参加したときのものです。曲はうちのバンド定番「セントルイスブルース・マーチ」。



私の偏愛

せんべいは、噛み砕くと破片が歯茎に刺さるような焼きたてよりも、多少シケているほうがよい。左様、封を切って1〜3日放置するくらいがよかろう。歯を立てると「おや、これは湿気たかな?」と首を傾げなくなるくらいに堅く、勇気を持って顎に力を込めると「モリッ」とした感触とともに尋常ならぬ圧力から歯茎が解放される、その一連の流れがよい。「モソッ」ではない。物足りない。カタルシスが重要なのだ。世間ではシケたせんべいと、ぬれせんべい、ぬれおかきを同列に並べて論評する輩もいるが、あれはポークカツレツとカツ丼の具を較べるが如き愚かな行為であるので、混同してはならない。せんべい汁などもっての外である。あくまでせんべいをシケらせねばならぬ。シケ党とはそういう生き物である。



Senbei

5

サイコーのオフィslランチ

先輩におごってもらうランチが最高です。アザーッス、ゴチニナリマス!

それだけじゃ寂しいので、オフィス周辺のお店をご紹介します。護国寺の入り口(駅ではなく寺の方)にある交番の隣、地味ですが正しい讃岐うどんが楽しめる「讃岐屋」がおすすめです。うどん脳になった日は、日替わりで色々なうどんを500円前後で出してくれる「試得(しっとく)うどん」を目当てに足を運んでみましょう。

2

3

涙したあの日

これまでいくつかの交流事業で、生徒の引率や、現場のサポートなど、参加した人びとと接することがありました。イベントが終わった後も、それぞれ日本語や韓国語などの勉強を続けていたり、「日本に留学にきた」といった電話を直接もらったときは涙がでるほど嬉しかったです。

事務局長になったら、これをやります!

海外のお客さんの接待に最適な美味しい店、酔いつぶれるまで飲みたくなるあの店などなど、職員の知識を総動員して全国食道楽マップ・データベースを構築するぞ。

10



7 風 4

漢字一文字で表すと…

だと思っただらいつの間になら風になってました。順風でも逆風でも高く昇ります。

森 亮 介



1 私が書いた記事
今日、これからあなたに読んでもらいたい、この記事がベスト1です。

びっくりした出来事

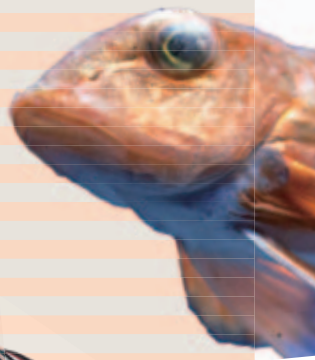
ある年のこと、「話してみよう韓国語」の会場下見で、韓国文化院ハンマダンホールを訪れました。当日は裏方として調整室などに入出入りするので、ホール担当者にも挨拶を、ということで会うことになりました。その前に名前や経歴などを聞きました。「ジョンさんは〇〇大学に音楽で留学に来た方で……」。なんとなく知り合いのような予感がしたので下の名前と演奏する楽器を聞くと、なんと韓国留学時代にオーケストラと一緒に演奏したことがある友人でした。「おい、チョルス(仮名)!!」と舞台からマイクで呼ぶと、「森ヒョン(=兄貴)? なんでこんなところに?!」と答えが返ってきて、みんなびっくり、感動の邂逅となりました。彼が留学で東京に来ていて、就職も日本で……という話は知っていたのですが、まさかこんなところで再会するとはね。再会の後は頻繁に会っているかという、そういうわけではなく、先日ソウルで行われた友人の結婚式に行ったときに受付でばったり会って「日本で会わないで、なんでこんなところで会うんだ」と言い合うような関係が続いています。



6 誰にもいえなかった失敗
通信機器の調子がおかしくて、事務所全体の電話、インターネットが不通になったことが何度かありましたが、実はそのうち1回は私の設定ミスが原因でした。ごめんなさい。もうしません。



〇〇なら負けません!
どんな写真でも、見栄えをよくしてみせます。



2

サイコーのオフィスランチ

神楽坂のイタリアン「Azzuri」のランチ。驚異の量です。豚肉のグリル頼んだら、手のひらサイズのロースが、な、なんと3枚も!! さらにパンは食べ放題! なのに激安。腹ペコなとき、または誰かを驚かせたいとき、是非どうぞ!

10

事務局長になったら、これをやります!

1ヵ月の長期休暇が取れる職場にしたいです。



〇〇なら負けません!

ずばり猫知識です。捨て猫を見過ごせない一家のため、小学生時代から実家にはいつも猫がいました。ご近所さまは「猫が異常に好きな家族」と勘違いし、毎年のように捨て猫が発生する羽目に。メロン用だろろうがジャガイモ用だろろうが、庭先に置かれた箱の中身はいつも子猫です。臍の緒がついたままの新生児(猫)には、牛乳を人肌に温めて飲ませ、親代わりの湯たんぽを設置し、一緒に遊んで情緒面を育み…… 何匹も立派に育て上げました。最盛期には20匹以上が暮らしていたのでした。猫人口が多すぎて、1匹が感染症にかかると全員に蔓延、糖尿病の猫には毎日インシュリンを打ち(これは母担当)……。しかし猫命は我が家の第一義だったので、働き出してから私の有給休暇はほとんど動物病院通いに捧げられました。そうして(何の役にも立たない)猫知識が蓄積!! でも悔いはありません!!

9



私の部屋を占拠した猫たち

柴田幹子



4

びっくりした出来事

以前の新宿オフィスの広大さ。入局時の面接であまりに閑散としているので「今日はお休みの方が多いのですか」と聞いたところ「これで全員です」と言われたとき。





漢字一文字で表すと…

現在いろいろなことで気が散って集中できないから。



8

実は私、こんなでした

大流行だったイタリア病に感染し、毎年旅行していた頃。本場の生ハム美味しい!! ワイン最高!! と飲み食いに明け暮れ(大学の学食にまで忍び込み)、いつもブクブクに太って帰国していたのです。

私が書いた記事

facebookで『外国語学習のめやす』の販売状況について報告した記事です。『外国語学習のめやす』3,000部が一気に事務所に運ばれたときには見上げるような山で、これが本当になくなるのかと心配でした。しかし、対面販売に留まらず、ネットでアジアや遠くはエジプトからもご注文いただくようになり、山も徐々に低くなってきます。同時に皆さまからのご支持が実感でき、大変嬉しく思っております。

1

誰にもいえなかった失敗

電話の受話器とコードを分解して掃除していたところ、電話が鳴り、受話器は本体から外れているのに「もしもし!! もしまし!!」と、しばらく受話器に叫び続けていたこと。

6



クリスタルの象の置き物

3

涙したあの日

年賀状の宛名ラベル作成のため、エクセルでデータ調整していたら、シート数が20以上に。あまりのデータ量にエクセルもワードも次々フリーズ。世間様はクリスマス、とっても楽しい日のはずなのに、仕事にならないわ、締切りは迫るわ、腱鞘炎になるわで、情けなくて泣きました。

私の偏愛

かなへび(かまちょろ)が好き。捕まえると目をつぶり仮死状態のようになりますが、呼吸のため薄い皮膚が波打ち生命を感じます。リラックスして日光浴している様子が大変かわいいのですが、東京では見かけないので寂しいです。

5

8



実は私、こんなでした

大学院時代、オーストラリア・メルボルンに留学していたころの写真です。大学の寮が満室で、シェアハウスで1年過ごしました。タバコをやめてもう10年以上になりますが、このころは庭先で南十字星を眺めながらの一服が最高でした!!

びっくりした出来事

外国語の先生を対象にした研修会が、私にとって TJF での最初の仕事でした。講師の先生はタバコが NG だと、繰り返し聞かされ注意していたにもかかわらず、用意されていたホテルの部屋が喫煙室だったときには、本当にあわてました。ホテル側のミスだったことがわかって、別の部屋が用意されることになりましたが、出だしからつまづいてどうしようかと思いました。気を取り直し、新しい部屋が用意されるまで、講師の先生たちと食事に出かけました。お店に入ってしばらくして、隣の席の人がタバコを吸いはじめたのには、正直「嘘でしょ〜」と目が点になりました。喫煙可のお店だったのです。すぐに店を出て、別の会場を探すのに必死だったことを覚えています。研修前日の出来事でした。

4

事務局長になったら、これをやります!

一定期間勤務したスタッフを対象に、専門性や技能の向上、自己啓発、あるいは創造的な休養、リフレッシュを図ってもらう制度(サバティカル制度)を導入します! 期間は半年~1年!

〇〇なら負けません!

出会いに恵まれていることでは誰にも負けません。その出会いにこれまでどれだけ助けられてきたことか。早く助ける側にまわりたいと思いつづけていますが、一向にその状況は変わりません。なんだかズルしているみたいで嫌なのですが、「そういう星のもとに生まれたんだから、受け入れなよ」と親しい友人に諭されます。最近では、本当に小さなことでも何か一つ、誰かのためにしようと思っています。「そんなの自分でできるからいい」と言われちゃうようなことしかできないんですけどね。

9

サイコーのオフィ斯拉ンチ

講談社の社食のサラダバーです。ご飯の量を減らして野菜を増やすよう管理栄養士から指導を受けました(おかずは食べてもいいということです)。小さなころから、おかずはそこそこにして、ご飯を食べなさいといわれて育った私には、なかなかできない食べ方です。野菜をたくさん食べるって大変ですよ。でも、サラダバーなら、毎日いろいろな野菜をおなかいっぱいいただけるんです。サラダバー LOVE です。

2

涙したあの日

2012年度に行った「日韓中高生交流プログラム—SEOULでダンス・ダンス・ダンス」は、韓国の新聞社から取材を受けるほど注目されました。取材された子どもたちにとって一番いい形の記事内容にするため、私と若手記者で締め切りぎりぎりまで書き直したことは忘れられません。子どもたちのことを一番に考え、政治的なことに利用されないように取材を受けることの難しさを痛感した出来事でした。

3



最後に、日韓両主催団体の長と、協力してくださった先生はじめ、関係者のみなさんから労をねぎらわれ、うれしかったのとほっとしたのとがいつべんにやってきて涙してしまいました。あれほど長い時間、涙を流し続けたことは過去になかったんじゃないかと思うぐらいです。打ち上げの席だったので、明るくしたかったのにどうにも止まらず、恥ずかしいやら申し訳ないやら……。





中野 敦

私の偏愛

私にはお気に入りのコーヒーカップがあります。同じコーヒーでもそのカップに注ぐとコーヒーが一段と美味しく感じられるんです。私にとって、コーヒーには、美味しくいただける量と形があるんです。量は、カップの大きさになるわけですが、形で重要なのは、空気に触れる表面の面積です。このバランスが重要。それに、口にするカップの質感も大事ですね。今、一番のお気に入りには自宅にあるカップです。みなさんにもそういうコーヒーカップありませんか？

5



★



私が書いた記事

月刊『英語教育』2013年8月号【リレー連載】多言語世界へのまなざし…【第5回】に寄稿した「外国語から『隣語』へ」です。記事は、英語の先生方に英語以外の言語あるいは広くことばというものに関心をもっていたかという趣旨の連載に掲載されたものです。主にTJFが取り組んできた中高生を対象とする日本の韓国語・中国語教育と韓国・中国の日本語教育の実践を紹介しながら、違う国の言語ではなく隣人の言語という考え方を、社会のグローバル化が急激に進むこのタイミングで発信できたことがよかったと思っています。

1

誰にもいえなかった失敗

恥ずかしい失敗はたくさんあるのですが、忘れられないのは、ある会場を研修会場・宿泊施設として予約していたのを忘れて、定められた期限を過ぎてのキャンセルの手続きになってしまったことです。結果、キャンセル料を支払うことになってしまいました。その上、人生ではじめて始末書を書くことになったのです。この失敗は忘れられませんね。組織の看板に泥を塗るような失敗はつらいですね。



6

雲

漢字一文字で表すと…

いろいろな考え方や価値観、方法やツールなどから、できるだけ自由でいたいと思っています。雲には、決まった形がないことや場にしばられず自由な様子を、自分と重ねて(あこがれ?)選びました。

7

〇〇なら負けません!

「凝り性」

キャリア・アンカーが「チャレンジャー」なので毎年何か新しいことを始めますが、徹底リサーチ→思い切りよく実行→あまりの凝りように周りはドン引き→少し寂しい気持ちになる、その繰り返しです。去年はインド料理（作るほう）、今年は自転車。ゴールデンウィーク前に買ったロードバイクで8月は毎週末100キロ走り、9月に入って200キロを雨の中15時間で走破して達成感に浸ったあたりから、周囲のリアクションが苦笑&引き気味に。さらに、房総半島が走りやすくて好きだからと10月に千葉寄りに引っ越した時点で、優しくスルーされるように……。

I Love Cycling



事務局長になったら、これをやります!

ことばや文化、価値観の「ちがい」を楽しみ、ときに耐え、あるいは上手に受け流し、話し合い、ちがうからといって排斥したり暴力に訴えたりしない。当たり前のようだけれど、子どもたちの目に映る日本社会は、それとはほど遠いのではないかという焦燥感があります。いまの水口さんの歳になったとき、たとえば代々木公園で平和と寛容のフェスティバルをやるとか、多くの人の思いを集めて若い人たちの耳に目に届けていくような仕事をしていたら嬉しいです。いま手がけている「りんご記念日」寄付キャンペーンは、その最初の一步。ぜひ検索してご参加ください!

涙したあの日

ときどき、ぼろぼろ泣いていることがあります。若い人たちが、小さな出会いをきっかけに新しい世界へ踏み出していく瞬間に立ち会うと、こんな仕事に関わってよかったな〜と涙腺にくるらしい。

漢字一文字で表すと…

察し(おっ!) 観察し(へえー)
考察し(うーん) 推察し(ふーむ)
省察し(むむむ) 洞察し(ははあ)
彰往察来(ってことは…)
というサイクルを、頭の中でいつも静かに回しているから。かなりの引っ込み思案ですが(特に対人面)、猪突猛進型の人と組むと良きブレーキ&ブレーンになります。ラブコールお待ちしております♡



実は私、こんなでした

23歳。マザー・テレサの「死を待つ人の家」で1ヵ月手伝いをしたとき、洗濯物をトタン屋根に広げて干しているところ。



10

安藤まどか



1 私が書いた記事

『Takrabako』28号「お弁当一食べる楽しみ、伝わる温もり」近年、「Bento」は世界から注目されるようになりました。「クール！（カッコいい）」と驚いてもらうのも悪くはありませんが、日本を、スゴイけれど理解できないエキゾチックな存在だと思わせてしまう日本文化紹介では心の距離は縮まらないと思うのです。そこで、海外の若い読者が「ワタシにもこんなカラフルでカワイイ Bentoが作れるかも!」とワクワクし、日本で暮らす人々を身近に感じられる記事をめざしました。

4

びっくりした出来事
最初の給与明細。



6

誰にもいえなかった失敗
出張中、目覚ましをかけずに寝てしまい、翌朝の待ち合わせ時間5分過ぎにホテルロビーから電話がかかってきて飛び起きたことがありました。3週間ひとりで北米5都市をまわって仕事をし、6都市目で上司2人に合流した翌朝のこと。お顔を見てホッとするという相手でもなかったのですが、つい緊張が解けたのかも……。

5

私の偏愛

30センチ定規。職場のデスクはもちろん、なぜか家の各部屋に一本は常備。材質、厚み、端まで測れるタイプか、目盛りの種類（センチ/インチ/両用）など、「ハンサム」な定規を選ぶうえでの細かい偏愛ポイントあり。買うのはダイソーでもOKですが、意外とお土産屋が狙い目で、二十歳のときオーストラリア旅行で買ったエアーズロックの写真つき定規は今も現役です。典型的な血液型 O型人間にもかかわらず、DIYや紙工作、料理など、精度が質に影響する遊びではモノをびったり測ることに萌えるため、台所で使う計量スプーン&カップ、電子スケールなどもこだわって選び、使うたびにウツトリしています。

2

サイコーのオフィスランチ

オーストラリアの高校に日本語の授業を見学しに行ったとき、先生が、校庭の片隅に設置されたBBQグリルでカンガルー肉を焼いて迎えてくださったのが忘れられません。



私の、10

8



Fight!

実は私、こんなでした

中学時代の体育祭：みんなの憧れ、体育祭応援団として、当日奮闘しているワンショットです。日焼けしすぎて、知人に「真っ黒!」と笑われることもしばしば。今となっては奮闘した証拠だと思えます。当時、写真に落書きをするのが流行っていました。自分で自分にコメントなんて、今見ると恥ずかしいですね。

びっくりした出来事

先日、私のキャビネットの奥から、「平成6年」の日付が書かれた書類が出てきました。19年間挟まったままだったようです。19年前……。当時私は4歳。TJFの歴史に少しふれられた気がして嬉しかったです。

4

私の偏愛

5 ミンティアのソーダ味のやつ。これがないと生きていけないかも。

5

○○なら負けません!

母との仲良しさは、誰にも負けない気がします。よく、「休みの日は何してたの?」と聞かれますが、大抵は母と家で遊んでいます。母と2人で、ごろごろしたりきゃっさしたり。「こんなこと、他の母子でもするのかなあ」とたまに母と話になるほど。

9

誰にもいえなかった失敗

先輩がアメリカのお土産でコーヒー豆を買ってきてくださり、「コーヒーミルで挽いて各々どうぞ」と言われました。比較的時間があまる私は、皆さんに挽きたてコーヒーを、と思って、小分けになった1袋を挽き、いつものコーヒーメーカーにその小分けの1袋分を入れ、いつもの通りのお水7杯分を入れ、スイッチオン。なんと、うすーいコーヒーができてしまったのです。小分けになっていたお豆は、「1杯分」の量だと知らず、その7倍の水で作ってしまったのでした。砂糖とミルクを入れる私は、飲んでも気づかなかったのですが……。



6

事務局長になったら、これをやります!

私が事務局長になるころには、自然とSOHOになっているのでは……(笑)。

7

夏

漢字一文字で表すと…

夏生まれ(6月後半なので初夏?)、なのに夏に減法弱い(ばてちゃう)、でも夏が好き(活気あふれる街の雰囲気とか)、そして何よりお笑いコンビの“さまぁ〜ず”が大好きなので。



10



マイ唐がらし
辛いもの大好きです

のベスト1

10×10+10...

事務局長以下10人のスタッフ（プラス理事長と常務理事）が10のベスト1を告白します。



宮川 咲



私が書いた記事

1

まだ学生のとき（といっても数ヵ月前まで学生でした）に、TJFのスタッフの方に「留学の体験談を書いて」と言われて書いた最初の記事です。中国の上海に留学していた私は、留学した理由、感じたことや体験したことなどを書かせていただきました。それから縁あってTJFに入り、TJFが共催で行っている千葉県中国語土曜日講座のことを書いたのが職員として最初の記事です。1年も経たない間に、学生としての記事と、職員としての記事とを書かせていただき、嬉しくもまた感慨深かったです。

サイコーのオフィスランチ

今のところ、どれもおいしいのですが、初日に、先輩に講談社の社食に連れてってもらったランチでしょうか。初めての通勤、初めての仕事、初めての講談社、初めての社員食堂、初めてのランチ！メニューも食材もはっきり覚えています。野菜のポトフの定食。にんじん、じゃがいも、玉葱、豚肉。味は薄め。なにより緊張をほぐそうと声をかけてくださった先輩の温かさが今でも思い出されます。

2



3

涙したあの日

12月末にTJFが開催する「日韓の中高生交流プログラム」に韓国・韓国語・K-POPに興味をもつ日本の生徒さんが多く応募してくれました。事務作業をお手伝いするなかで、生徒さんの参加したい気持ちや韓国への熱意などを拝見しました。実は私は高校生のとき、TJFが企画運営した第1回「漢語橋：日本の高校生サマーキャンプ」に参加していました。当時の私と、現在の高校生の気持ちがダブってしまって、懸命に送ってくれる生徒さんの思いを感じるたび、心に来るものがありました。ひとりで応募動機を熟読していたら、泣いてたかもなあ。

国際文化フォーラム通信

no.100

謎ときTJF



特集

10×10+10...

公益財団法人
国際文化フォーラム
THE JAPAN FORUM
日本国際文化交流財団
일본국제문화교류재단